

論理的思考を養うための ワクワク読書遍歴

出口治明



1948年、三重県生まれ。APU(立命館アジア太平洋大学)学長。「人類5000年史I、II」(ちくま新書)「本の『使い方』」(KADOKAWA)、「[全世界史]上下」(新潮社)など著書多数。

呉座勇一さんの著書の中で『応仁の乱』(中公新書)と並び、『陰謀の日本中世史』(角川新書)もおもしろかったと話す出口さん。

第一線で活躍されている経営者やリーダーは、どんな本を読んでいるのか。どんな基準で本を選び、読書体験から何を学んできたのか。そんな素朴な問いかけから、このシリーズは始まります。第二回目は、ライフネット生命保険の創業者であり、現・APU(立命館アジア太平洋大学)学長の出口治明氏にご登場いただきました。

本の虫は小学生の頃から生続く

大分県別府市の市街地を見下ろすAPU(立命館アジア太平洋大学)のキャンパス。出口さんは歴史関連書籍をはじめ、企業経営者やリーダー向けの多くの著作で知られているが、それらはすべて膨大な読書体験に裏打ちされたものだ。1万冊以上の読書遍歴を持ち、今なお、毎月12〜15冊のペースで読み進めている。

「僕は幼い頃から本の虫でした。小学生の頃は自然科学書が特に好きでしたね。高校・大学時代になると、宇宙論や生物学から文学、歴史、哲学、宗教、美術へとジャンルが広がっていききました。いまでも、脳科学や心理学など新しい知識を探る分野への興味は尽きません」

出口さんにとって岩波文庫に代表される「古典」の類は常に身近な読書対象だった。一方、新刊本の選び方は、新聞の書評欄を3紙ほど読んでワクワクしたら、インターネットで買うか図書館があれば借りて読む。ジャンルは問わずだ。本屋で立ち読みするのはまず最初の10頁。そこで引き込まれなければ買うことはない。

ヒントにすることもできる。読書体験は、人生をおもしろおかしく豊かにする強力なツールとなる。

読書で論理的思考力を身につける

出口さんは近年注目した本の1冊に呉座勇一さんの『陰謀の日本中世史』を挙げた。

本能寺の変では、歴史作家や在野の研究者が陰謀論をテーマに、いくつもの「真相」を論じている。それを謎解きエンターテイメントとして受け取ってくれば問題ないが、史実と誤解してしまふ読者が少なからずいるとの危機感から呉座さんが筆をとったという1冊。

「本能寺の変での黒幕探しにイエズス会、朝廷、秀吉、家康まで担ぎ出される現状を論破し、光秀の単独犯以外の答えは出てこない」と結論づけています。この本は中世史のいくつかの陰謀を客観的・実証的に分析していますが、現代においても陰謀論とおぼしきものに惑わされないために論理的思考力を身につける必要性を説いているのは、全く同感です」

出口さんは、論理的思考力を養うには、まず知識や考える型をインプットすることが不可欠と話す。その方法は「人・本・旅」の3つを挙げる。多くの人に会う、たくさんの本を読む、たくさん旅すること。その中心になるのが本を読むことで、出口式「縦横算数」を実践して、論理的思考を心がけることが大切という。

「縦」は時間軸で、古典や歴史から学ぶこと。「横」は世界軸で、現代に生きる異なる境遇の

人やモノに触れ、世界に目を向けること。「算数」とは数字で表される客観的データと考える。「世の中の事象をリアルに映すものに、数字とファクト(事実)があります。これらを抛り所にロジック(論理)を積み上げていきます。論理的に思考する際の基本になります。そこには、科学的根拠や実証的分析を度外視した、日本人が陥りやすい根拠なき精神論や美しい物語的解釈の入り込む余地はありません」

最後に学長としての立場から学生たちにはどんな本をすすめているかお聞きした。

「僕は入学式で新入生全員に本のリストを渡しています。そして、目に見えるかたちで図書館や生協に推薦図書のコナーをつくってもらっています」

リストは英語と日本語で表記され、古典のジャンルのみ30冊が網羅されている。若い世代に向けた出口さんの「読書のススメ」は、90を超える国や地域の学生の間で少しずつ浸透し始めている。



出口さんの著書「座石の書『貞観政要』」(KADOKAWA)は、経営者やリーダーたちに広く読まれている。

「新聞の休日版に掲載される書評欄は、著名な学者や作家、評論家がみな署名入りで書いています。プロの知識人が必死に本を選び、書いた文章を読んで、興味を持てた本は、まず間違いないありません。それだけ、選ぶほうも責任とプライドをかけて挑んでいますから」

本の読み方にルールはないが、出口さんの読書術は明快だった。「本を読むことは著者の話を聞くことと同じ、速読は百書あって一利なし」。自分のなかで腹落ちするまで一行一行丁寧に読み込む。1冊読んで感動したら、誰でもいいから、しゃべりまくりなさいと説く。それからブログでもフェイスブックでも、その感動を言葉で表現しなさいと。人間は、言葉によってしか頭の中を整理できないからだ。

「本を書き始めたのは、2008年、前職のライフネット生命保険を創業した後のことです。それまでは友達とよく議論していました。おもしろい本を読んだら、しゃべりたくなりますよ。だから言語は単なるコミュニケーションツールではなくて、思考のツールとして把えています。自分の言葉に置き換えない限り、記憶として定着しません」

出口さんのスゴイところは、読書体験を素通りさせることなく、自身を「ワクワクさせてくれる教養」として血肉化する学びの姿勢を貫いてきたことだ。

血肉化した知識は「自分の辞書」のなかで1頁ずつ厚みを増していく。必要に応じて辞書を開いて、日々の生活に役立てるもよし、仕事の